

新年号

京 印 季 報



2019 新春特別企画

京都府印刷関連団体協議会 会員団体代表者座談会
「～印刷、同関連業界の明るい未来の創造に向けて～」



目次

年頭所感／京都府印刷工業組合 理事長 中西隆太郎	2
京都府知事 西脇 隆俊	4
京都市長 門川 大作	6
京都商工会議所 会頭 立石 義雄	7
京都府中小企業団体中央会 会長 渡邊 隆夫	8
(一社)日本印刷産業連合会 会長 金子 眞吾	9
全日本印刷工業組合連合会 会長 臼田 真人	10
京都府製本工業組合 理事長 山崎 喜市	11
京都府紙器段ボール箱工業組合 理事長 戸田 正和	11
(一社)日本グラフィックサービス工業会京都府支部 支部長 高屋 伸啓	12
京都紙工協同組合 理事長 西村 公男	12
京都シール印刷工業協同組合 理事長 大槻 裕樹	13
京都グラフィックコミュニケーションズ協同組合 理事長 木村 進	13
新春特別企画 京都府印刷関連団体協議会 会員団体代表者座談会 「～印刷、同関連業界の明るい未来の創造に向けて～」	14
平成30年度京都府産業功労表彰を受ける	22
平成30年度京都府中小企業関係組合功労者表彰を受ける	23
2018全日本印刷文化典高知大会開催	24
全印工連組合功労者顕彰を受ける	26
～印刷感謝祭～ 本木祭並びに組合員物故者を偲ぶ会開催	27
一京都ものづくりフェア2018～ 京都府印刷関連団体協議会と「ものづくりコラボ展」を合同出展	30
京都府知事表彰・京都府職業能力開発協会会長表彰を受ける	32
第2回・第3回教育研修セミナー開催	33
第2回労務対策セミナー開催	35
街頭宣伝活動を実施	36
10月・11月定例理事会開催概要	37
委員会だより／組織共済委員会	38
支部だより／中支部	39
下支部	40
会合だより／京都府印刷関連団体協議会	41
／京都青年印刷人月曜会	43
／京都印刷協和会	43
／いそじ会	45
関連団体だより／京都府製本工業組合	46
／京都府紙器段ボール箱工業組合	47
統計だより／材料価格定点調査・集計結果より	49
／中小企業景況調査・京都府の概況より	50
組合員ニュース	52
ビデオ・DVD貸し出しのご案内	56
書籍のご紹介	57
事務局からのお知らせ	57
印刷会館利用状況	58
組合員異動	58
訃報	58
組合日誌	59
表紙イラストレーション作者のご紹介	60
編集後記	60



新年号表紙イラストレーション コンセプト

「門松」

年神様を迎えるために門前に飾る門松と、今年の干支である「亥」を描きました。
新年を迎えることができる喜びとワクワクする気持ちをぐるぐる周り飛び跳ねるイ
ノシシで表現しました。

京都造形芸術大学こども芸術学科2年次生 寺岡奈名子

年頭のご挨拶

京都府印刷工業組合 理事長
中西隆太郎



新年明けましておめでとうございます。

旧年中は組合運営にあたり格別のご理解とご支援をいただき、ありがたく厚く御礼申し上げます。

本年におきましても、全日本印刷工業組合連合会(以下全印工連)をはじめとする業界内の有益な情報を組合員の皆様に確実に伝えるよう努力してまいります。引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、昨年は異常気象が長期間続いたうえ、自然災害も多発した一年でした。

また、京都の地価上昇率が7.5%となり、2年連続で全国一位を記録しました。最も高い上昇率は29.2%だったので、ほぼ3割値上がりした土地もあったということです。

その背景にあるのは、インバウンドによる訪日客の急増です。京都の宿泊者が直近の5年間で4倍になり、対応するためのホテルの建設ラッシュにより地価が高騰したようです。四条通などの繁華街では相応のホテル用地を入手できなくなったため、最近では周辺地域でも続々とホテルの建設が行われています。

このような傾向は決して他人事ではありません。会社の近隣で再開発が始まると、止む無く工場の売却や印刷業の廃業をお考えになる方がおられるかもしれません。

昨年の夏期研修会においては、全印工連の常務理事・経営革新マーケティング委員長の福田浩志氏をお招きして、「今から始めよう、印刷業界のための事業承継」と題した講演会を開催しました。経営は順調であっても、様々な理由により次の世代へ事業を継承出来ない印刷会社が全国に多数あり、中には廃業を考えておられるケースも少なくありません。福田氏の経営される会社では、そのような企業に対してM&Aを含めた事業の承継策を提案され、数々の成功例を実現してこられました。

なお、突然廃業される企業は、やはり組合等との交流が少ないケースが多いようです。常日頃から組合員の皆様とのコンタクトを積極的に図り、能動的にご相談に応じるなどの取り組みが必要との説明でした。

京都には歴史のある業界がたくさんあります。中でも筆頭に挙げられるのが、全国的にも有名な、舞子さんと芸妓さんの集まる五花街です。舞子さんに憧れ、地方から来てお茶屋さんや置屋さんに入る女性も多数おられます。そのような五花街の中にも廃業されるお店はあります。但し、廃業される場合は必ず顧客を別のお店に紹介されますので途絶えることはありません。周りに迷惑のかからないよう配慮したうえでお店を閉めら



れます。

私たち中小印刷業界においても、得意先との深い結びつきを背景に受注を受けるケースが非常に多いのではないのでしょうか。止むを得ず廃業される印刷会社を知り得た場合は、是非とも当組合や全印工連事業承継支援センターにご相談いただくようご助言いただきたい。組合員をはじめ、信頼のおける企業へ事業を承継していただくことで、顧客に迷惑をかけることはありません。また、「中小印刷会社の仕事は中小印刷会社が引き継ぐ」を徹底させることで、地域内における市場規模の維持発展にも繋がります。

ところで今年は経営環境の変化が非常に大きな年となりそうです。まずは製紙会社より、新年出荷分から印刷・情報用紙を一斉に10%から20%の値上げをすると通知がありました。

また、人手不足も引き続き深刻な問題です。昨年実施された、全印工連のダイバーシティ経営に対するアンケート調査では、外国人労働者を一人も雇っていない印刷会社が90.6%を占めました。結果だけを見ると、現時点では印刷業界は人手不足で困っていませんが、全印工連では、今後は印刷会社も外国人労働者に頼らざるを得ないときが必ず来ると見えています。

加えて、働き方改革の推進に伴って労働時間法制が見直され、関連法が順次施行される予定です。有給休暇の5日取得不履行に対する罰金制度をはじめ、様々な規制が科せられる可能性があります。

このような大変厳しい経営環境の中で事業を続けていくには、一層の自助努力が必要とされます。京都府印刷工業組合では、今年も組織を挙げて組合員の皆様に有益な事業を推進・展開し、組織の拡充と業界の発展・向上に努めてまいります。

なお、本年2月2日(土)、京都ホテルオークラにおいて、京都青年印刷人月曜会・全国印刷緑友会共催による「全国印刷緑友会京都セミナー」が開催されます。次の時代を担う京都の青年印刷人達が、全国規模のイベントを企画・開催するパワーを持ち合わせていることを知り、非常に頼もしく、また嬉しく思いました。今後も京都の印刷産業の振興・発展に向けた活動に大きく邁進してくれると期待できます。若い人たちの活発な活動を是非とも応援していただきますようお願い申し上げます。

結びにあたりまして、本年も皆様にとって明るく充実した年となりますことを祈念し、年頭のご挨拶とさせていただきます。

新たな京都へ

京都府知事
西脇 隆俊



組合員の皆さま、あけましておめでとうございます。

昨年4月、府民の皆さまからのご信託を賜り、京都府開庁から150年目の年に、第51代京都府知事に就任させていただきました、西脇隆俊です。

知事就任にあたっては、「現場主義を徹底すること」「前例にとらわれないこと」「連携すること」を職員に指示し、6月には「将来に希望の持てる新しい京都づくり」に向け、「安心で暮らしやすい社会の構築」「京都産業の活力向上」「スポーツ・文化力による未来の京都づくり」を重視した肉付け予算を編成して、府政をスタートさせました。

しかし、その直後には、6月の大阪府北部地震や7月の豪雨、9月に入ってから台風21号や24号、それに伴う強風被害や大雨など、次々と自然災害が襲いかかりました。改めて、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、被害に遭われた皆さまにお見舞いを申し上げます。

京都府では、災害後、直ちに補正予算を計上し、復興、復旧に向けた対策を講じるとともに、府民の皆さまの安心・安全を守るため、災害対応の検証を行い、先進的な防災・減災対策や治水対策、危機管理体制の強化充実など、地域防災計画の見直しを進めているところです。

一方で、昨年は、2020年のNHK大河ドラマが、京都ゆかりの明智光秀を主人公とした「麒麟がくる」に決定したことや、京都大学の本庶佑特別教授がノーベル生理学・医学賞を受賞されるなど、歴史や文化、学術のまち京都にとって、大変喜ばしい出来事も多くありました。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催や、2021年度中とされる文化庁の全面的な京都移転、そして2025年国際博覧会(万博)の大阪・関西での開催を控え、日本そして京都への世界からの注目度は、今後ますます高まります。このチャンスを逃すことなく、本年9月に開催されるICOM(国際博物館会議)京都大会等においても、京都府内各地の多様な文化資源をアピールし、「日本の文化首都・京都」を世界中に発信してまいります。

今、国内外から多くの観光客が京都を訪れています。2017年の観光入込客数は約8,700万人、外国人宿泊客数は約360万人、観光消費額も過去最高の約1兆1,900億円を記録しました。しかし、それらの多くは京都市内に集中しています。

京都縦貫自動車道の整備や新名神高速道路の新区間開通によって、南北のアクセスは格段に向上しました。鉄道やバスの利用も含め、海・森・お茶の京都、竹の里・乙訓といった「もうひと



つの京都」への周遊を促すことが重要です。観光客の満足度の向上や観光地の広域連携等を盛り込んだ「京都府観光総合戦略」を策定し、府内各地に効果が波及するよう取り組みを進めてまいります。

今年の3月には、「京都経済センター」がグランドオープンします。京都府・京都市・京都経済界が「京都経済百年の計」として力を結集し、京都経済の発展を支える拠点になるものです。このセンターを核に、オール京都体制で産学官の連携や人材育成、生産性の向上に一層取り組んでまいります。

こうした明るい未来に向かって、様々な取組を推進する一方で、私たちの足元には、乗り越えなければならない課題が山積みとなっています。日本は、少子化・高齢化がますます進展し、本格的な人口減少社会に突入することは避けられない状況です。東京への一極集中も依然として続いており、地域コミュニティが弱体化する中、労働力不足も深刻です。

私は、そうした課題に臆することなく立ち向かい、全ての世代の皆さまが暮らしやすい社会の実現を目指した「子育て環境日本一」の取組等を通して一つ一つの課題解決に努めてまいります。

さらに今年、天皇陛下が4月30日に御退位され、皇太子殿下が5月1日に御即位されます。現在、策定を進めている京都府の将来構想及び基本計画となる「新総合計画」では、新しい時代に対応した「夢のある将来ビジョン」を掲げ、次代を担う子どもたちが希望を持てる未来へのロードマップを描いてまいります。組合員の皆さま、「新たな京都」に向けて共に歩みを進めてまいります。

今年一年の皆さまのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



「輝かしい時代のスタートを 京都から」

京都市長

かど かわ だい さく
門川 大作



あけましておめでとうございます。

昨年は、地震や豪雨、度重なる台風等に見舞われ、自然の脅威を思い知らされる一年でした。京都市でも、長期の停電、家屋や文化財・公共施設、農林、道路などに大きな被害が発生。しかし、尊い命は守られました。これは、消防団や水防団、自主防災会等の皆様の御尽力があればこそ。御尽力いただいた全ての皆様に心から感謝申し上げます。これらの災害をしっかりと総括し、今後の安心安全のまちづくりへ教訓としてまいります。改めて京都の「地域力」「人間力」を目の当たりにし、困難を乗り越えて更なる発展を遂げる「レジリエント」なまちの真髓を見出した思いです。これらの「京都力」を企業の持続的発展や、地域における子どもたちの学び、育ち、高齢者や障害のある方が生き生きと命を輝かせるまちづくりへ、共に生かしてまいります。

そして本年。京都のまちを更にパワーアップさせる機会が目白押しです。京都経済百年の計「京都経済センター」の開設や、京都に根ざした「地域企業」を応援する条例で、中小企業・地域企業を元気に！JR「梅小路京都西駅」の開業、日本初開催となる「国際博物館会議（^{アイコム}ICOM）京都大会」、市美術館のリニューアルオープンも来年度中に。5年連続で保育所等待機児童ゼロを達成した子育て支援、指定都市トップとなった市立小学生の学力など成果を確認し、更なる充実へ。福祉、環境、景観、安心安全、伝統産業等の振興につながる観光、町家の保全、持続可能なまちづくりなど、引き続き市民の皆さんと共に汗する「共汗」で、全力投球してまいります。

ラグビーワールドカップ、東京オリンピック・パラリンピック、そして2021年には世界最大の生涯スポーツの祭典「ワールドマスターズゲームズ関西」、さらに機能強化した新・文化庁の京都への全面的移転が控えています。2025日本万国博覧会（大阪・関西）の開催も決定！これらを機に、文化の力を市民の皆さんの豊かさにつなげ、持続可能な社会を目指すSDGs（^{エスディーエス}「誰一人取り残さない」を理念に国連が掲げる17の取組目標）の達成にも貢献していく決意です。平成に続く新たな時代が幕を開ける本年。京都が世界の人々の幸せと平和に貢献すべく、共に全力を尽くします。

皆様のこの一年の御多幸をお祈りします。



「京都経済センターを拠点に 新時代への飛躍を」

京都商工会議所 会頭
立石 義雄



謹んで新年のごあいさつを申し上げます。

本年3月、京都商工会議所は、明治18年から130有余年にわたって事務所を構えた烏丸夷川の地を離れ、四条室町に完成する京都経済センターへと移転いたします。京都経済センターは、「京都経済百年の計」として京都府や京都市、産業支援機関など、オール京都で整備を進めてきたもので、完成は京都経済界の悲願でもあります。

私は会頭就任以来、「『知恵産業のまち・京都』の推進」を基本方針に掲げ、知恵ビジネスを展開する意欲的な中小企業の発掘と集積に力を注いできました。また、行政や経済界などのトップが議論を重ね、2013年に策定した「京都ビジョン2040」では、京都が目指すまちの姿として、国内外から人や情報が集まり、交流・連携から新たな価値が生まれる「世界交流首都・京都」を目指すことを提示しています。こうした長期のまちづくりビジョンを実現するための“場”となるのが、3月16日にグランドオープンを迎える京都経済センターです。新たなネットワークの創出や価値の創造を目指して、分野や垣根を越えた多様な連携・交流を促進させることで、「知恵産業の森」を形づくる多様な知恵ビジネスが生まれることを期待しています。とりわけ、京都の未来を担う若手起業家や、創業を目指す学生等が切磋琢磨する場となり、京都経済を牽引する産業人材の育成と京都発の新たな知恵を生む拠点となるよう、関係団体とさらに連携を強化して取り組みを進めて参ります。

本年の干支は「己亥^{つねい}」。干支は植物の成長に例えられ、己は草木が十分に生い茂って整然としている状態、亥は草木が枯れ落ちて種の内部に生命力がこもっている状態を指し、どちらも基礎が固まり、次のステップに向けて飛躍するための準備が整うという意味になります。今年には京都経済センターがオープンし、京都経済の飛躍に向けて土台が整う重要な年です。2021年までに実現する文化庁の京都移転や、北陸新幹線の早期全線開通などを見据えながら、平成の次となる新たな時代へ向けて、充実した一年になることを期待しています。

本年が皆さまにとって、実りある年となることを祈念いたしますとともに、本所活動への一層の参画をお願い申し上げます、新年のあいさつといたします。

地域に貢献する組合を 目指して

京都府中小企業団体中央会 会長
渡邊 隆夫



皆様 明けましておめでとうございます。

日本経済は、成長は鈍化しているものの底堅さは維持しておりますが、我々中小企業を取り巻く状況は、人手不足が深刻となっており、以前にも増して厳しい状況におかれております。ただ、このような厳しい時代だからこそ、いま一度原点に立ち返り、組合の果たすべき役割を再考していくことが重要であります。組合の持つ力を十分に発揮できるよう支援していくことが、我々、中央会に課せられた根本的な役割であり、そのことこそが中央会の存在意義にも通ずるものであります。地域経済を支え、地域力の発揮を担っているのは我々中小企業であり、組合であるとの強い気概を持ってこの一年を乗り切っていきたいと思っております。

平成31年・亥年は、我々中央会の存在意義でもあります地域組合への回帰の年として位置づけ、我々中小企業そして組合にとって雌伏の時期を経て飛躍の年になりますことを、新年初頭にあたり強く念じているところであります。

昨年は、35年ぶりに京都で三回目となる「中小企業団体全国大会」を開催いたしました。従来の全国大会は、3000人超の規模で体育館やアリーナなどの広い会場で実施しておりましたが、京都では初めての取り組みとして、会場を上七軒歌舞練場と西陣織会館という中央会会員の所有する2つの施設での開催としました。当初から、もっとコンパクトな大会にと思っておりましたが、全国からの参加者が予定よりもかなり増加し、ご不便をおかけした点多々あったことと存じます。ただ、単に従来通りの大会を開催するのではなく、「おもてなしの心」で、全国からお越しいただいた皆様にはできるだけ楽しんでいただく大会になるよう努めたところであります。そのような中、全国の皆様には京都市内だけでなく、京都府北部や南部の歴史、自然、文化にも触れていただきましたことに感謝申し上げます。この全国大会の開催を契機として、本年が全国の中小企業・小規模事業者、組合、そして我々中央会の更なる飛躍の年になるよう願わずにはられません。

更に本年は、新しく誕生する「京都経済センター」に経済支援団体が一堂に会する記念すべき年でもあります。それぞれの団体がお互いの持つ力を集中して、京都経済が活力を発揮できる元年にすべき年であり、新しい元号の基、力を結集して京都力を高めるスタートの年でもあります。心を新たにして、中小企業の発展のために、そして、地域の発展のために全力を注ぐ所存であります。

皆様方のご支援を賜りますよう心からお願い申し上げまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。



年頭所感

日本印刷産業連合会 会長
金子 眞吾



新春を迎え、日本印刷産業連合会を代表して、ご挨拶申し上げます。

昨年の国内経済は、企業収益や雇用・所得環境の改善が続くなか、穏やかな回復基調が続きました。一方、米中貿易摩擦の激化などによる海外経済不確実性に加え、相次ぐ自然災害による影響もあり、景気の先行きには不透明感も残りました。印刷産業においては情報メディアのデジタルシフトなどにより、印刷需要は減少傾向が続き、原材料関係の値上げや物流費の上昇など経営環境は厳しいものでした。

そのような中、今年の経営環境に目を向けますと、IoT、AI、ビッグデータ、RPA（ロボットによる業務自動化）、クラウドコンピューティングなどの新しいICT（情報通信技術）が創出する変革が進み、官民挙げて推進するSociety 5.0の実現が益々現実味を帯びてまいりました。印刷産業にとって、この変化は、対応に相応の努力が課せられるものの、大きなチャンスとも言えるのではないのでしょうか。

印刷会社はビジネスパートナーとして、環境の変化に即し新たなビジネスモデルに挑む顧客企業の活動に寄り添い、貢献してまいりました。従来の印刷技術に加え、新たなテクノロジーを積極的に取り入れつつ顧客企業の進化を支えることにより、印刷産業は進化発展し、社会から求められる産業として持続することが可能となります。今年はさらにこの対応を進化させることで、印刷産業自身も「第4次産業革命」と言われる大変革の中で存在感を示す年にしたいものです。

日本印刷産業連合会は昨年から取り組んでいるSDGsを軸に、今年も様々な活動を推進してまいります。地球環境への配慮については、これまでの活動に加え、廃棄プラスチック問題に取り組むことと致しました。プラスチック製包装資材等を環境負荷の軽減に向け、賢く作り・使い・処理していく対策を、関係各省、経団連などと連携し進めてまいります。ダイバーシティについては、女性活躍推進施策として印刷業界で働く女性の新たなネットワーク作りを支援します。また、新たな外国人材受け入れの制度についても、印刷産業に相応しい方法を経済産業省と検討を進めてまいります。地方創生では、昨年加入した内閣府が推進する「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」を活用し、各地域における印刷業界の成功事例発表を行い、京都府をはじめ日本全国の印刷企業の活動を支援していきます。

今年の8月には、技能五輪国際大会がロシア連邦・カザンで開催されます。日本代表選手が世界の舞台で実力を発揮し、活躍してくれることを期待いたします。

本年も日本印刷産業連合会は活動方針であるグランドデザインに基づき、関係省庁、会員10団体、関連業界団体、各種専門機関と連携し活動を進めてまいります。皆さまには、引き続きご支援、ご協力をお願い申し上げますとともに、ご繁栄とご健勝を祈念して、新年の挨拶とさせていただきます。

新年のご挨拶

全日本印刷工業組合連合会 会長
臼田 真人



明けましておめでとうございます。

旧年中は当連合会に格別のご支援とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

また、昨年10月に開催いたしました「2018全日本印刷文化典高知大会」には、全国から540名を超える方々にお集まりいただき、全印工連の団結と協調、さらには将来の業界発展に向けての課題や方向性を再確認することができましたことは、全国の印刷工業組合の役員、組合員、関連業界の皆様のご理解とご協力の賜物と深く感謝を申し上げます。

さて、「少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少」や「育児や介護との両立など、働き方のニーズの多様化」への対応に直面している現在、投資やイノベーションによる生産性向上とともに、就業機会の拡大や意欲・能力を存分に発揮できる環境を作ることが、働き方改革の重要な課題になっています。こうした中、この課題解決のため、働く方の置かれた個々の事情に応じ、多様な働き方を選択できる社会を実現し、働く方一人ひとりがより良い将来の展望を持てるようにすることを目指していくため、先般、働き方改革関連法案と呼ばれる一連の労働法改正が成立しました。

このように労働環境が激変する中、全印工連では、組合員企業の従業員がやりがいを持ち、安心して働き続けられる職場作りによって、新たな付加価値を創出し、顧客満足度を高め、ひいては組合員企業の業績向上につながるHappiness Companyを目指していただくことを目的に、「幸せな働き方改革プロジェクトチーム」を立ち上げ、ステップ1からステップ5のプロセスを構築し、全組合員への発信を続けているところです。新しい働き方改革、そして、幸せな働き方改革、これを実現するためには、いくつかのプロセスが必要となりますが、取組みは経営者の決断となります。緊張が張りつめた会社からコミュニケーションが図れる心理的安全性の高い職場へと変え、新しいイノベーション、新しいビジネスを生み出す企業への転換が急がれます。

本年も引き続き、当連合会のブランドスローガン「Happy Industry 人々の暮らしを彩り幸せを創る印刷産業」へとつながる、待ったなしの「働き方改革」をさらに推進するとともに、構想から10年、事業を立ち上げて3年目を迎え軌道に乗りつつある事業承継支援、さらには、大きな進展を見せた知的財産権保護の促進、併せて、中小印刷産業振興議員連盟との連携による官公需の取引改善、資材値上げ問題への対応など、全印工連の大きな組織力を存分に活かした事業活動に全力を挙げて取り組み、全国の組合員企業の皆様のお役に立てるよう一層精進してまいります。

新しい元号となる2019年が皆様にとって明るく希望に満ちた素晴らしい一年となりますよう心から祈念いたしまして、年頭のご挨拶といたします。



念頭の御挨拶

京都府製本工業組合 理事長

山崎 喜市



新年あけましておめでとうございます。

旧年中は本組合に対しまして多大なる御協力・ご支援を賜り厚く御礼申し上げます。2019年の新春を迎え、謹んで新しい年のご挨拶を申し上げます。

昨年はデータ改ざんや無資格者による検査など、日本を代表する大企業の失態が続きました。免振や耐震性についてのデータ改ざんは安全性に大変な問題があり、取引相手やユーザーに対する信頼関係は音を立てて崩れてまいります。我々製本業に携わる者としたしましては、印刷組合の皆様との間で培ってきた信頼関係をますます強固にすることで、お互いの業績の向上に結び付けていきたいと考えています。

なお、全日本製本工業組合連合会が業界紙に製本業界の窮状に理解をお願いする記事を掲載しました。印刷業界の皆様におかれましては、この度の活動趣旨にご理解賜り、少しでも取引慣行の改善と適正な取引条件にご配慮願えればと切に思います。

さて、今年は平成最後の年であるとともに、新元号の時代の幕開けでもあります。加えて、2020年は東京オリンピックが開催され、2025年には万国博覧会が大阪で開催されます。国を挙げた大きなイベント次々と控えており、関西地方も少しは経済が上向くのではないかと期待していますが、先が読めないのが今の時代です。

前回の「京都ものづくりフェア」では、教育委員会の方より「小学校に出張して製本の仕方を教えてもらえないか」との打診があまりました。愛される製本業をアピールする絶好の機会と捉え、前向きに検討を進めているところです。経営環境は益々厳しさを増す一方ですが、現状を打ち破る熱い思いを共有し、組合員全員の力でより良い年にしていきたいと考えています。

本年も京都府製本工業組合に変わらぬご支援・ご協力をお願いいたしますとともに、印刷組合の発展と皆様の事業所のご繁栄・ご健勝を祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

新年にあたって

京都府紙器段ボール箱工業組合 理事長

戸田 正和



新年明けましておめでとうございます。旧年中は印刷関連の皆様、組合員、協賛会の皆様には大変お世話になりました。あらためまして御礼申し上げます。今年の新年互礼会は7団体に加え箔押業組合の方々も参加していただき誠に喜ばしいことと思います。

さて、紙器段ボール業界は景気の追い風にもより、また通販関係の好調にもより順調に推移してきました。しかしながら昨年からの米中貿易戦争により、古紙の高騰、中国での環境問題での厳しい規制などで、紙器段ボール業界は厳しい環境におかれています。毎年のように段ボールシートの値上げ、板紙の値上げ、流通費の高騰により、製品単価の値上げが思うように進んでいません。関連の皆様方には是非とも御協力のほどお願い申し上げます。

他組合と同じように、当組合においても年々組合員が減少しており、歯止めがかからない状態です。これから先、果たして組合が存続していくのか、存続するためにはなにをしなければならないのか、後世の時代に組合が存続していくため真剣に取り組んでいかなければならない問題だと思えます。幸い京都は印刷関連協議会合同での取り組みが他業種より蜜に出来ていると思えます。今後、事務所や事務局の共有化、事業の共同化など、生き残るための方策を考えていかなければならないと思っています。そして、印刷関連団体以外の紙に関係する組合にも新年互礼会に参加していただけるようになれば、より先進的な協議会になれると思えます。今年一年、どうぞよろしく願い致します。

「生き抜く為に 行動しよう！」

年頭所感



(一社)日本グラフィックサービス工業会京都府支部

支部長 高屋 伸啓

新年あけましておめでとうございます。

新しい年を迎え皆様におかれましては、恙なくお過ごしのことと存じます。

旧年中は格別のご支援ご協力を賜わり厚く御礼申し上げます。

本年もご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

昨年は災害が多発した年でしたが、京都においては台風21号の強風によって被害をうけました。幸いにも当組合には大きな被害がありませんでしたが、皆様はいかがでしたでしょうか。今こそ関連団体の横の繋がりで災害にも強い体制を取りたく思いました。

10月には管外研修で太陽精機(株)(ホリゾン)本社を工場見学、11月には2日間で31,000人の来場者を記録した「京都ものづくりフェア2018」に合同出展しました。青年部様のご協力により、私達の「ものづくりコラボ展」ブースは4年ぶり6回目の奨励賞を受賞するなど大盛会でした。

年末にありました座談会では、製本組合様の協力のもと製本業界の業態研究を行い、関連団体で新たなコラボレーションによる新製品開拓の実案が見えてきました。

合同新年互礼会におきましては、昨年関連7団体全てが揃いましたが、本年は7団体の他に箔押業組合様にもご参加いただき、年々盛大になってまいりました。本年は当団体が担当でしたが、皆様には大変お世話になり本当にありがとうございました。

厳しい経営環境のもと、これからも京都の印刷業界の皆様と手を取り合って前進して行く所存です。

結びにあたり、関連団体各位の益々のご発展とご健勝を祈念し、新年のご挨拶といたします。

新年のご挨拶



京都紙工協同組合 理事長

西村 公男

あけましておめでとうございます。

平成31年は、干支暦では「己(つちのと)亥(いのしし)」年となります。「己」は陰の土性で、田園を意味します。田園は人の住まいする場所だと言われ、生活の場があり、作物の収穫もあります。また、「亥」は陰の水性を意味する十二支です。「亥」は、木偏をつけると「核」という字になり、強いエネルギーを意味します。

「己亥」が意味する年は、強い意志や力、エネルギーを持って、庶民のパワーが増すという意味があり、将来へ向かって新たなスタートを切る年です。

本年は、新たな元号がスタートし、日本の再発達の年となります。天皇陛下の生前退位があり、新たな天皇陛下が日本の象徴になられ皇室の慶事が話題となり国内が明るくなります。

来年2020年に東京オリンピックが開催され、2025年には大阪万博が決まりました。国際イベントがこれから続き、明るい未来が期待されます。

「己亥」は、地道な努力をもって運気が上がるという、将来へ向かって新たなスタートを切る年であることから、印刷関連7団体の技術力やノウハウなどの情報をお互いに交換し、知恵を出し合い、新たな一歩を踏み出す年としたいものです。

本年が、皆様方にとって明るく希望に満ちた素晴らしい一年となることを心から祈念いたしまして新年のご挨拶と致します。



年頭所感

京都シール印刷工業協同組合 理事長

大槻 裕樹



新年あけましておめでとうございます。

旧年中は、当組合に賜りましたご指導、ご協力に感謝申し上げます。

流行語大賞に、答えを間違うと「ポーっと生きてんじゃねえよ」と5歳の女の子に叱られるNHKの番組から生まれた言葉がノミネートされていました。ポーっと生きている私はそのセリフに思わず首をすくめるところですが、ギシギシとんがって自分の所得のみ考えている方や、自社に都合のいい数字のみ公表する企業や一部の官僚を見ていると、ポーっと生きることも「また良し」ではないでしょうか。

近江商人の「三方よし」の根底には信頼によるネットワークがあります。「商売の心得十訓」にも「資金の少なきを憂うなかれ、信用の足らざるを憂うべし」とあり、信頼関係の中で許し許される関係作りが、商売の原点だと読み取れます。

印刷関連団体として「合同新年互礼会」や「ものづくりフェア」など様々な事業を通じて交流なども進んでいます。関連団体によるコラボレーションの話もこの新年号の座談会で話されています。信頼される組合づくり、信頼される仲間づくりをより進めてまいります。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。

年頭所感

京都グラフィックコミュニケーションズ協同組合

理事長 木村 進



新年あけましておめでとうございます。

旧年中は格別のご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございました。本年も相変わリませずご指導、ご鞭撻いただきますようよろしくお願い致します。

早いものです。365日が過ぎました。365日の内、納得のできる努力の日が何日あったのかと振り返っています。

話は変わりますが、ある有名な経済学者が15年ほど前に述べられた、「これからの30年間は混乱する覚悟をもって生きていくことが大切です」という言葉が今、身に染みて実感しています。まだ半分残っています。この先15年間も混乱の時代が続くそうです。

私達の業界を見回してみますと、本当に混乱が更に増していくように思われます。この1年をどのように見、どのように考え、どのように行動するのか。今年は私達の今後を占う年になりそうです。

京都グラフィックコミュニケーションズ協同組合は、今年も理事会を中心に情報を交換するなど有意義な時間を共有し、且つ親睦をより深めて苦境にめげず前進していきたいと願っています。

今年こそ良い年になりますよう祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

京都府印刷関連団体協議会 会員団体代表者座談会 ～印刷・同関連業界の明るい未来の創造にむけて～

①関連7団体の業態研究／製本業界の業態について

②京都の印刷・同関連業界の未来と動向 ③関連7団体だからできること



座談会出席者 前列左より木村進氏、山崎喜市氏、中西隆太郎氏、戸田正和氏、大槻裕樹氏
後列左より爲國光俊氏、福野慎吾氏、西村公男氏、高屋伸啓氏、蒲田敏也氏

平成30年12月6日(木)午後6時30分より京都印刷会館 1階第2会議室において、京都府印刷関連団体協議会の会員団体代表者による座談会が開催されました。

第11回目の節目となる今回の座談会では、前回の座談会において、「関連7団体のコラボを実現させるには隣接業界の業態を理解することが必要」との提議があったことを受け、関連7団体の業態研究の第1弾として、製本工組様より製本業界の特長と未来に向けた事業展開について語っていただきました。

また、例年同様、各団体の現状と実施事業について報告を受けるとともに、7団体の連携によるコラボレーションや社会的課題への対応など、「関連7団体だからこそできること」についてディスカッションしていただきました。

今回の特集記事では本座談会の要旨をご紹介します。全印工連が推奨する「業態変革」の推進や、「ソリューション・プロバイダー」への転身に繋げるためにも、隣接する印刷関連業界の職域に理解を深め、お互いにメリットのあるコラボレーションを構築する一助にいただければ幸いです。

出席者

- 中西隆太郎氏〔京都府印刷工業組合 理事長、中西印刷(株) 代表取締役会長〕
山崎 喜市氏〔京都府製本工業組合 理事長、山崎紙工(株) 代表取締役会長〕
蒲田 敏也氏〔京都府製本工業組合 専務理事、(株)蒲田文寿堂 取締役社長〕
戸田 正和氏〔京都府紙器段ボール箱工業組合 理事長、(株)トダコーポレーション 代表取締役会長〕
高屋 伸啓氏〔(一社)日本グラフィックサービス工業会京都府支部 支部長、たかや印房〕
西村 公男氏〔京都紙工協同組合 理事長、(株)西村紙行所 代表取締役社長〕
大槻 裕樹氏〔京都シール印刷工業協同組合 理事長、(株)大槻シール印刷 代表取締役会長〕
木村 進氏〔京都グラフィックコミュニケーションズ協同組合 理事長、(株)プリントバック 取締役会長〕
爲國 光俊氏〔京都府印刷工業組合 専務理事、為国印刷(株) 代表取締役〕
福野 慎吾氏〔京都府印刷工業組合 理事・情報ネットワーク委員長、(有)章美プリント 代表取締役〕

(京都府印刷関連団体協議会 会員団体代表者座談会要旨 発言者の敬称略)

はじめに

福野：皆様こんばんは。京都府印刷工業組合(以下印刷工組)の情報ネットワーク委員長を務める福野です。恒例の印刷関連7団体の座談会も11回目となりました。今回も皆様より忌憚のないご意見を聞かせいただきたいと思います。それでは京都府印刷関連団体協議会の会長を兼任する印刷工組の中西理事長より、開会の挨拶も兼ねて口火を切ってください、以降はご着席順に時計回りでご発言をお願いします。



中西：印刷工組の理事長を務める中西です。本日はご多忙の中、各団体の代表者全員の方々にお集まりいただき誠にありがとうございます。初めに前回の座談会を振り返ってみたいと思います。冒頭で私は、『ものづくりフェアでのコラボ』を『仕事の中でのコラボ』へ広げられないかと提議を行いました。そして、そのためには各団体が対外的に自らの特徴をアピールする必要があり、「ブランド力」を作る必要があると申し上げました。続いて京都府製本工業組合(以下製本工組)の山崎理事長より、「製本業界ではブランドづくりが難しい」と述べられた後、個々の企業の取り組み事例として、山崎紙工さんが御朱印帳専門の「京都紫音」というブランドを立ち上げたことについての報告がありました。次に(一社)日本グラフィックサービス工業会京都府支部(以下ジャグラ)の高屋支部長より、「5年前より外国人観光客の入出国のデータ分析を行うなど印刷需要に繋げるための勉強に取り組んでいる」との報告を受けた後、京都シール印刷工業協同組合(以下シール協組)の大槻理事長より、「学生の意見やアイデアを聞き取る企画を半年に1回・計3回実施していて、今後はアイデアコンテストを行いたい」と報告がありました。また、『ブランド』よりも『ニーズ』を吸い上げる方が大事ではないか」というご意見を頂戴



しましたので、私は、「生活に必要なという意味の『ニーズ』よりも、皆が欲しいと思う『ウオント』を考えるべきだ」と申し上げました。続いて京都グラフィックコミュニケーションズ協同組合(以下京都GC)の木村理事長より、「地方の方は京都に大きな期待を寄せておられる」と伺った後、日本人は実態のないものには出費しないと痛感され、「商品」として販売できる印刷通販に業態をシフトしたというエピソードを話していただき、「関連7団体の中で新しい商品が生まれ出せないか」というご提案を頂戴しました。この話を受け、京都紙工協同組合(以下紙工協組)の西村理事長より、組合員は和菓子を包む包装紙やお寺のお守り、おみくじ等の仕事をされている会社が多いこと、平成29年度は既に2,400万人以上の外国人が訪日されていて、オリンピックの年には4,000万人を目指している等の話を聞かせていただき、「7団体で外国人観光客のニーズに合った、コンパクトで廉価な京都らしい紙製品を開発できないか」というご提案を頂戴しました。最後に京都府紙器段ボール箱工業組合(以下紙器段工組)の戸田理事長より、「私達の仕事はBtoBが主なので、自ら何かを作ることがほとんどないが、売れるものを作ろうと思わず、ユーザーと一緒に取り組めばよいアイデアが生まれ出されると思う。京都人の気づいてない京都のよさがあり、京都というだけでプラスアルファの印象を持ってもらえる」とのご意見を頂戴しました。これらの話を統合しますと、観光客に販売できる、京都ならではの小ロットの小さな紙製品として、例えば千社札シールやオリジナル御朱印帳が導き出せるのではないのでしょうか。千社札シールは、今回は実現しませんでした。ものづくりフェアで取り組もうという提案もありました。また、御朱印帳は、神社仏閣とコラボすれば一層効果が高まりますし、千社札シールのコレクションノート等、別の用途でも使用できます。このようなアイデア商品を関連7団体で開発するのも面白いと思いました。

関連7団体の業態研究／製本業界の業態について

中西：前回の座談会では、シール協組の大槻理事長より、「各団体の業態を他の団体の人は案外知

らないものだ。お互いにもっと知り合うことができればコラボレーションの可能性が広がる。関連7団体の業態の勉強会ができないだろうか」との提案がありました。本座談会では、この提案を受ける形で、テーマの一つ目を「関連7団体の業態研究」としました。第1回目の今回は、前回の座談会を振り返る中で導き出された「御朱印帳」を作っておられる製本工組様に、「製本業界の業態について」と題して、昨今の業界情勢と業態の特長等についてご説明していただきます。山崎理事長が代表を務められる山崎紙工さんでは、円谷プロとのコラボによる「ウルトラセブン御朱印帳」など、従来にはないオリジナル商品の企画にも取り組まれ、大変好評のようです。

山崎：製本工組の理事長を務める山崎です。本日は製本業界の業態についてご説明するため、蒲田専務理事にも同席してもらいました。私達製本工組の組合員は、かつては全国に2,400社程ありましたが、今では700社にまで減っています。京都の組合員に限定すると、ピークの147社が38社にまで減少しました。組合員の業態としては、中綴じ、アジロ綴じ、御朱印帳等に分類されます。それぞれ専属で行っている会社もあれば、両方取り扱っている会社もあり、形態は様々です。一種のみ行っている会社より、総合的に幅広く仕事を受ける会社の方が業績は良いように思います。蒲田専務理事や私の会社は、一般的な製本とは別に、和本、経本、御朱印帳等にも取り組んでいます。ありがたいことに、御朱印帳の仕事量は拡大傾向にあります。

以前は紙工協組さんと一緒に活動していた時期もありますが、残念ながら50年位前、原因は定かではありませんが、袂を分かつことになりました。従いまして、この数年来、紙工協組さんをはじめ、関連7団体とコラボに取り組めることは大変喜ばしく思っています。ものづくりフェアへの取り組みに際しても、7団体の連携により情報が素早く伝わり、コラボするメリットは大きいと思います。7団体間の情報が開示されることにより、マッチングできる回数も増えていくように思います。こ

れからも7団体の皆様と力を合わせて取り組んでいきたいと考えています。

蒲田：製本工組の専務理事を務める蒲田です。前回の座談会の記録を拝見すると、京都ブランドを意識しておられる方が多いように思いました。私達も同様です。何年も前から、同業の仲間や印刷関連の気心の知れた人が集まると、「どうすれば京都のブランドを前面に押し出した商品が作れるのだろうか?」と、いつも話し合っています。まだ具体的な話には進んでいませんが、国が推進している「beyond2020プログラム」への取り組みが1つのヒントになるように思います。「beyond2020プログラム」とは、次世代に誇れるレガシーの創出に資する文化プログラムを認証し、ロゴマークを付与することですが、京都でも京都文化力プロジェクト実行委員会が事業を推進しています(京都文化力プロジェクト認証事業)。既にブランドイメージが定着した観光と同様、文化的な業界である印刷や製本の仕事においても、「京都の会社に発注したい」と思わせるイメージを植え付けたい。そのためにはどうすればよいのか。まずはブランドのイメージ戦略を確立するところから始めようと思っています。

中西：ブランドを作るなら特徴が必要です。

蒲田：製本の中では、特長のある製品のひとつが御朱印帳だと思います。印刷では何でしょうか。

中西：印刷工組では、数年前、京都の色、フォント等を開発して「京すりもの」と命名しましたが、思うように広がりませんでした。特長が明確でなく差別化が難しく、共感を得られなかったことが要因だと考えています。

戸田：私達が京都らしい御朱印帳をイメージすると、黒谷の和紙を使ったり、外側に京友禅の紙を張ったりすることを考えますが、おそらく他府県の人はそこまでこだわりが無いと思います。京都から発信するだけで京都らしい御朱印帳と思ってもらえる。



蒲田：京都というブランドイメージを前面に出すことにより、漠然としたものでも「何かいいよね」と思ってもらえるイメージ作りをしていきたい。例えば京都市や京都府、東京の旅行代理店や広告会社など、官民両方に働きかけを行い、オリジナルな御朱印帳めぐりのパッケージツアーを企画するのも面白いと思っています。他の地方では不可能な、京都だからこそ実現できる企画です。

中西：先程も述べましたが、「ブランド」よりも「ニーズ」、「ニーズ」よりも「ウオント」だと思います。抽象的ではなく、皆が欲しいと思う具体的な価値を作らなければいけない。皆が訪れたいと思う旅行の企画があれば人は集まるだろうし、記念に取っておきたいと思わせるような御朱印帳があれば買ってくれると思います。

蒲田：最終的には、私達だけの認証マークを作り、そのマークを付けている企業に発注したいと思わせる仕組み作りを目指しています。商品ではなく企画でもいいと思っています。企画はアイデアがあれば作れます。一例を挙げると、鉄道会社主催の「お伊勢さんツアー」が大変人気だそうです。参加すると、専用の御朱印帳がもらえるからです。旅行会社や鉄道会社のツアーに御朱印帳を売り込むことで、印刷や製本の仕事が生まれます。東京からの人を呼び込むツールとして御朱印帳は大変有効です。私達で面白い御朱印帳巡りの企画を作り、東京の旅行会社や鉄道会社に提案していけばよいのではないのでしょうか。そして印刷や製本の仕事を呼び込む。可能なら京都ブランドの認証マークを入れるところまで持っていきたいと思っています。

京都の印刷・同関連業界の未来と動向

福野：旅行会社、鉄道会社など様々な業界とタイアップして、印刷や製本の需要を開拓し、京都に仕事が回ってくる仕組み作りを京都の関連7団体、或いは会員事業所間の連携の中で取り組む。とても面白い試みだと思います。皆様のコラボレーション事例を発信することにより、会員事業所同士のコラボレーションを促す契機にもなりますので、引き続き取り組んでいただきたいと思います。続いて各団体様の動向についてお聞かせ下

さい。

戸田：紙器段工組の理事長を務める戸田です。今ほどの団体も同じだと思いますが、当組合も最大で150社位の組合員が、今は36社にまで減少しています。全国組織である全国紙器段ボール箱工業組合連合会も、ピークは600社位でしたが、脱退する組合、解散する組合等があり、今は維持することさえ難しくなっているのが現状です。組合員が減少すると組合運営が非常に苦しくなります。個人的には、西日本の4つの紙器段工組、或いは印刷関連団体間の中で事務局の共同化ができないかとも考えています。

仕事の面に関しては、数年前、メインの業態である段ボールの工場が次々と海外に移転し、極端に受注が減少した時期がありましたが、この数年の間は通販や物流の仕事が毎年数%位伸びています。但し、受注しているのはほとんどが大手です。町中の箱を作る中小規模の会社は年々少なくなっています。跡を継ぐ人がいないため吸収合併されるところも増えています。当社は紙箱がメインですが、機械化に成功している会社には相応に仕事があるようです。やはり特色のある仕事をしないと仕事は増えません。

いつも組合活動をアピールできる施策を考えています。そのような中、11月後半に京都市へ防災協定の申し入れを行いました。地震で被災した地域に段ボールのベッドを供給するのです。私達の上部団体には、段ボールの大手メーカーで組織している組合があり、関東や九州地区において次々と市、県と協定を結ばれており、既に京都府とも締結されています。せめて京都市には当組合と協定して欲しいと思っています。なお、体育館でブルーシートを引いて直に寝る場合とベッドで寝る場合を比較すると、その後の生存率に大きな差が生じます。ヨーロッパでは全てベッドが支給されます。協定を結ぶことができれば、段ボール製ベッドの供給だけでなく、数か月も避難しなければならぬ被災者の方々の娯楽となる、段ボール製の卓球台やスマートボール等の提供も考えています。このような活動を積み重ねることで、組合の存在価値が認められるようになると思っています。京都市で成功すれば、大阪や兵庫、九州地方の市町村との協定締結も考えています。



高屋：ジャグラ京都府支部の支部長を務める高屋です。団体名が長いので、通称はジャグラと名乗っています。10月31日現在の全国組織の組合員数は918社です。南は沖縄から北は北海道までが対象ですが、岐阜、三重、鳥根、佐賀、長崎には会員がいません。全国一律に同じサービスを提供できる、ジャグラBBというネットワークを結んでおり、最新の情報を瞬時に受け取ることができます。また、様々な勉強がWEB上でできます。本部は東京ですが、東京には別組織の東京ジャグラもあります。東京ジャグラとジャグラの両方に入っている企業もあります。現在、京都府支部の組合員数は16社ですが、印刷工組と両方に加入されている会員も多いようです。スペース21という青年部の活動もあり、私達も刺激や元気を受けることが多々あります。京都、滋賀、大阪、兵庫、奈良、和歌山が1つのグループとなり、近畿地協を組織しています。同様に、中国、四国、九州など他の地区にもそれぞれ地協があります。

最近ではPOD（プリントオンデマンド）に取り組む会社が増えているので、情報システムの連携についての研究を進めています。PODを中心に様々な情報システムと繋げることにより、どのような効果が生まれるかを勉強しています。既に可視化、自動化、分散処理等が実現しています。加えて、東京にはDTPスクールがあり、学生にDTPの基本を教えています。卒業生も多数おられます。更に事業承継を目的としたM&Aの研究にも取り組んでいます。個人情報保護に対応するためPマークの指定審査機関にもなっています。事業の多くは東京本部が主体となって行っており、京都独自の事業としては、勉強会、懇親会、ボウリング大会等があります。



大槻：シール協組の理事長を務める大槻です。現在の組合員数は20社です。最盛期は40社位あったので半減したことになります。全国組織の組合員数は1,700社位がピークでしたが、今は700社を大きく割

り込んでいます。東京、大阪では廃業や脱退が多いようですが、地方は比較的落ちついてます。最近の組合の課題の中では後継者問題が一番大きいように思います。昔のように、親・子・孫が社内にそろっている会社は少ない。規模的にも、会社組織として経営されるケースは少なく、家内工業的な会社が多いと思います。家族で営んでいるので、息子が継いでくれなければ直ちに経営ができなくなります。なお、東京では互いにライバル関係にある会社が多いので、廃業した会社の仕事分散し、結果的に大手が持っていく状況が起きています。可能であれば、廃業する会社の仕事を組合の中で引き受ける仕組みを作りたい。実現すれば組合の大きなメリットになると思います。

そして、やはり一番大きな問題は売上が伸びないことですが、印刷機が高額化していることも経営上の負担になっています。私が37、8年前に始めたときは600万円の機械1台で十分仕事のできたのですが、今は2,000万円から3,000万円の輪転機が主流になっています。無理をして購入しても、借金を返すことが負担になります。加えて、最近では1色毎にユニット化され、機械が大型化されました。少なくとも5メートルはあるので、自宅を工場にしている場合は機械が入りません。

その他、組合活性化のため様々な勉強会を開催しており、今年は全抜き勉強会を行いました。シールには剥離紙があり、上のシールだけ残したハーフカットの形式が多いですが、最近では全部抜いて欲しいとの要望が多く、様々な商品が開発されています。昔は生地を下に引き、ぐるぐる回しながら上に運んでいく加工をしていましたが、今はもっと上手にできる方法があり、技術的な情報交換を行う趣旨で企画しました。各社の方法を動画で撮影してもらい、それを持ち寄って勉強会を行います。大事なノウハウなので、公開することを躊躇する会社もありますが、技術を知らなかったため仕事が他の業界に流れるというケースも沢山見受けられます。シール業界の仕事はシール業界の中で回したい。この試みは大変好評で、大阪や東京をはじめ全国各地から反響がありました。

もう一つは、前回にもお話した、学生を交えた勉強会の企画です。シール協組も全国組織の連合会があり、2019年は京都が全国大会の運営を担当

します。会場は琵琶湖ホテルです。毎回ラベルコンテストを併催していて、自分たちの作った一番いい作品を提出するフリー課題の他に、同じデザイン・紙・色で刷って見当や色の合わせ方などを競う規定課題もあります。今回はコンテストのテーマになるデザインを学生に描いてもらう予定です。優秀者には賞品を用意し、全国大会の式典で表彰します。この一連の取り組みを通して、学生さんにシール印刷という業界、仕事があるということアピールしたいと思っています。また、毎年ラベルコンテストの規定課題が発表された後、実際に使われる機械を用意し、京都で指折りの職人さんに協力いただき、目の前で刷りながらアドバイスしてもらう機会を設けています。腕利きの職人さんのノウハウを学べる絶好の機会なので、組合員事業所のオペレーターが多数参加されます。質疑応答の時間も設けているので、組合員間、従業員間の交流にも結び付いています。2月に開催して全国から60数名の方々に参加されました。遠くは北海道からの参加もありました。次回も2月に開催する予定です。

木村：京都GCの理事長を務める木村です。当組合の組合員数のピークは50数社、それが今は8割以上がなくなり、残っているのは2割を切っています。製版の仕事は印刷会社さんに頼っている面が多いため、印刷会社さんの受注が減れば間違いなく製版の仕事も減ります。最近はおんデマンド印刷の需要が増えているため、私達の業界でも導入する会社が増えました。導入しないと設備のある会社に仕事を取られてしまうからです。絶対的な仕事量が少なくなっていると思います。30年程前、マックが発売されたとき、営業先の担当者から、「マックができたので、もう製版の仕事は要らなくなるね」と言われたことを今も覚えています。自分たちが本業としている仕事を「要らない」といわれ、とても辛かった。繰り返しますが、印刷の仕事が減れば製版関係の仕事も間違いなく減ります。従って、私達が今目指しているのは、印刷の仕事を増やす方法です。組合としても一番大事な取り組みだと考えています。



組合の組合員数のピークは50数社、それが今は8割以上がなくなり、残っているのは2割を切っています。製版の仕事は印刷会社さんに頼っている面が多いため、印刷会社さんの受注が減れば間違いなく製版の仕事も減ります。

組合活動としては、理事会で情報交換を重ねるとともに、組合員間の親睦を深める事業にも力を注いでいます。親睦を深めていると、時々ぼろっと本音が出てきます。そのような中で得たヒントを逃さず、お互いに切磋琢磨しながら勉強に勤めています。

西村：紙工協組の理事長を務める西村です。現在の組合員数は24社、他に機械メーカーや資材会社等による準組合員が31社あります。ピーク時の組合員数は50社位だったので、半減したことになります。組合事業では、主催行事として、毎年断裁機の安全講習を行っています。今年で13回目を数えました。第1部はフォークリフトの安全講習です。45分間、事故事例の報告等をしてもらい、気を付けるべきポイントについて解説していただきます。メインである第2部の断裁機安全講習では、約1時間半、みっちり指導していただきます。昨年、一昨年は、奈良の印刷組合より多数のご参加があり、3年前は金沢から多くの方に参加していただきました。断裁機の安全講習が終わると、各事業所に1枚、証明書を渡しています。事務所に置いておくと、この会社は安全衛生に取り組む模範的な会社だと見てもらえます。また、修了者全員にも顔写真入りの修了証を渡しています。断裁機の近くに掲示していただくことで、オペレーターにきちんと安全講習を受けさせているとアピールすることができます。加えて、修了者自身も、講習したことを実行しなければならないと気を引き締めて仕事に取り組んでくれます。他には、従業員や従業員のご家族にも参加していただけるビアパーティーを8月初旬に実施しています。組合行事は代表者や二世会メンバーへの講習等が多いですが、ビアパーティーは従業員との親睦が図れる貴重な行事として長年続けています。



の組合員数は24社、他に機械メーカーや資材会社等による準組合員が31社あります。ピーク時の組合員数は50社位だったので、半減したことになります。組合事業では、主催行事として、毎年断裁機の安全講習を行っています。

今年で13回目を数えました。第1部はフォークリフトの安全講習です。45分間、事故事例の報告等をしてもらい、気を付けるべきポイントについて解説していただきます。メインである第2部の断裁機安全講習では、約1時間半、みっちり指導していただきます。昨年、一昨年は、奈良の印刷組合より多数のご参加があり、3年前は金沢から多くの方に参加していただきました。断裁機の安全講習が終わると、各事業所に1枚、証明書を渡しています。事務所に置いておくと、この会社は安全衛生に取り組む模範的な会社だと見てもらえます。また、修了者全員にも顔写真入りの修了証を渡しています。断裁機の近くに掲示していただくことで、オペレーターにきちんと安全講習を受けさせているとアピールすることができます。加えて、修了者自身も、講習したことを実行しなければならないと気を引き締めて仕事に取り組んでくれます。他には、従業員や従業員のご家族にも参加していただけるビアパーティーを8月初旬に実施しています。組合行事は代表者や二世会メンバーへの講習等が多いですが、ビアパーティーは従業員との親睦が図れる貴重な行事として長年続けています。

なお、紙工組合には全国組織がないので、愛知、京都、大阪の3組合により、「東海近畿打抜紙工協議会」というトムソンの部会を運営しています。持ち回りで会合を企画し、1時間程度の勉強会と親睦会を行っています。親睦会は他府県の同業者と親しくなれる良い機会となっています。一杯飲

んで話をすると、本音をぼろっと話してくれる時があります。また、紙工協組には、以前は断裁、折り、打抜きの「截抜部会」、「トムソン部会」があり、各々の部会で工場見学や勉強会を開催していましたが、最近は組合員数が減っているのので、一杯飲みながら近況報告を聞かせていただく形の合同部会を実施しています。仲間内でしか聞けない情報が入ってくることも大きなメリットだと思っています。例えば、古い機械はメーカーにも部品が無い場合が多く、トラブルが起きたらそれまでと思っていたのですが、「京都の〇〇社や〇〇社なら見てくれるよ」という貴重な情報を聞かせてもらえることがあります。年末は講演会を企画・開催していますが、今年は中小企業診断士の先生に講師を務めていただき、「社員の心理状況に合わせたリーダーシップの発揮法」というテーマのもとで勉強会を開催しました。

関連7団体だからできること

福野：各団体様より貴重な情報やご意見を聞かせていただきありがとうございます。ここからは、前回の座談会から今回にかけて、実際に皆様の会員事業所間の中で生まれたコラボレーションの事例等があればお聞かせ願えないでしょうか。

山崎：印刷工組の中西理事長より、御朱印帳がつくれる会社を探されている組合員さんと、上製本ができる会社を探されている和歌山県の印刷会社さんを紹介していただき、コラボさせていただきました。私の会社で対応できない場合は別の会社をご紹介します。

蒲田：先日のもづくりフェアの際に、京都市の方がブースにこられ、学童教室で製本の勉強会を開いてもらえないかと打診がありました。まだ具体的な話にまでは進んでいませんが、何らかのお手伝いができれば良いかと考えています。

福野：昨今、日本には様々な社会的課題がありますが、今後、避けては通れない大きな課題の一つとして、国が推進している働き方改革への対応があります。このような社会的課題に対し、連携して積極的に課題解決に向けて取り組むことも、関連7団体の大きな役割として期待されているのではないのでしょうか。

中西：働き方改革は、10月に行われた「2018全日本印刷文化典高知大会」でも大きく取り上げられました。労基法の改正により、年次有給休暇取得の義務化や月60時間を超える時間外労働に係る割増賃金率の中小企業への猶予措置の廃止等が決まっており、多くの経営者は非常に危機感を感じておられました。働き方改革に対して、経営者は売上が落ちるのではないかと警戒し、従業員は残業代がなくなり収入が減るのではないかと心配をしています。これまで7時まで残業していたものを、無理をして5時に終えても今までと同じやりかたでは仕事は片付きません。従って、作業効率の改善を考えることに時間を費やさなくてはならない。その取り組みを行うことで従業員間に会話が生まれ、新しいイノベーション、新しいサービスが息づいてくる。ギスギスした環境下では新しい商品は生まれません。古き時代のビジネスモデルや制度を改めてなくてはならない。制度改革や生産性向上のための投資を決断する必要がある。これは会社の規模に全く関係しません。一例を挙げると、日本では電球を替えるために電気屋さんを呼んだとき、同時に回りのほこり等もきれいに拭いてくれます。単に電球を替えるのではなく、グロー球など周辺機器も見てくれます。一方で、アメリカやヨーロッパでは電球だけを替える。周りにほこりが落ちていようが床に積もっていようが関係ない。日本の作業性の低さは顕著で、2017年の一人当りの労働生産性はOECD加盟国の35か国中21位、G7の中では最下位でした。このようなことから改善していかなければ、日本の企業は働き方改革を実現することはできません。

全印工連では、業界団体として働き方改革への取り組みを支援するため、具体的施策を教えるセミナー講師を派遣すると発表がありました。当組合で開催する機会があれば、7団体の皆様にもお声かけしたいと考えています。

福野：まだまだお話は尽きないところですが、予定の時間も近づきましたので、ここで印刷工組の爲國専務理事より、本日の総括を述べていただきます。

爲國：印刷工組の専務理事を務める爲國です。本日は皆様より貴重なお話を聞かせていただき、大変有意義な協議を重ねることができました。各団



体様の業界情勢がよくわかり、大変勉強になりました。

今回は関連7団体の業態研究の第一弾として、製本業界の業態についてのお話を聞かせていただきましたが、製本会社さんにも様々な形態があ

る中、総合的な会社と特色を持っておられる会社の業績が安定しているとお話でした。なお、今回は御朱印帳のお話が大きくクローズアップされました。手作業が大きなウエイトを占める御朱印帳は、だれにでもできる技術ではありません。他にはない特殊な技術が必要とされていることを痛感しました。シール協組の大槻理事長のお話の中でも、技術を競うラベルコンテストの話がありました。特色のある商品をつくるうえで、今後は技術力がキーワードになってくるのではないかなと思います。ヨーロッパでは、例えばブランド力のある織物は様々な用途に使われていて、大きな価値を有しています。例えば下請のメーカーでも独自のブランド力を有すれば、消費者に直接売り込める力を持っている。その力は何かといえば、織りの技術であることは明白です。差別化された印刷の技術や御朱印帳の技術があり、そこに京都ブランドを被せるようなストーリーを考えていけば、もしかすれば本当に売れる商品ができるのではないかなと思っています。

他にも、紙器段工組様の、被災した地域へ段ボールのベッドを供給するという防災協定の申し入

れ、シール協組様の、廃業される企業に対する受け皿作り等、新たな組合価値の創造に向けた取り組みも大変興味深く聞かせていただきました。組合の価値の有り方については、どの組合も相当悩んでおられると思います。今後の活動状況についても是非情報共有をさせていただければと思います。

最後に働き方改革ですが、残業時間、有給取得など様々な課題があります。労働人口は確実に減少しているのも、私達の持っているこれまでの価値観を捨て、もっと多様性のある、女性、外国人、障害者、高齢者の方々が生き生きと働ける労働環境を構築しなければなりません。そして未来を担う若い人たちが少しでも多くこの業界に入ってきてくれるようになれば、事業承継問題も含め、多くの課題は徐々に解決していくのではないかなと思います。何事にも前向きに捉える必要があるということを感じました。

福野：最後になりましたが、関連団体協議会の副会長を兼任される、製本工組の山崎理事長より、閉会の言葉をお願いいたします。

山崎：本日は大変ご多忙の中、本座談会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。過日のものづくりフェアでは、私達のブースは4年ぶり6回目の奨励賞を受賞することができました。関係各位の皆様のご努力が実り、本当に良かったと思います。合同新年互礼会においても多数の方のご参加をお願いいたします。

(文責 編集委員会)

